世田谷村日記

石山修武

十月七日

五日六日の二日間早朝から夜まで稲田堤でのモンスター作りに没頭した。久し振りに現場に立ち職人達、スタッフ、学生と共に作業をした。二日間の事だが私には重要なワークショップだった。今、早朝にこのメモを記している。二階では高橋工業の社長が疲れて寝ている。彼も職人達の陣頭指揮で二日間を共にした。

気仙沼から社長以下職人五名。車輌三台、石山研車輌一台スタッフ私を含めて三名、学生五名で長さ十五メーター、高さ五・六メーターの子供の遊具を組立てた。ネジ止めの組み立てではない。全てメタルの溶接である。この事は私にとっては大事だ。つまり専門技術（溶接）を持つ人間と素人（フリーター）の合作現場だったのだ。車輌重機の類を駆使したのも私の三〇年昔の菅平の農家作りとは全く異なる事であった。

開放系技術は人力建築、セルフビルドの建築への論ではない。スピード、パワーがそれでは表現する事ができない。私がこの現場でえた実感はスピードと重機（クレーン）の力、それに人間の様々な能力がミックスされたら、凄く面白いモノができるという予感だ。人間の力で動かせぬものを重機は簡単に運ぶことができる。それを巧みに設計に組み込む必要があるのだ。そんな事は普通の大型建築の現場では常識だと言われるだろうが、そうではない。私のこの現場では機械と人間が混在していた事が大事なのだ。それにたった二日間の現場であった事も大事だった。それで私もスタッフも、職人達も労働を楽しむ事ができた。単純な繰り返し作業と謂はゆる重い労働は人間を機械の奴隷にしてしまう。しかし、機械を人間の道具として使用し、人間の能力＝考える力を駆使していけば面白いモノ作り＝楽しい労働という世界が開けてゆくかも知れない。

ともかく、巨大遊具の現場製作は面白かった。モンスターと呼びたい事の意味は勿論姿形が異形であるということだけではない。機械と人間が混在して始めて可能な物体でありたいという意味もある。今朝は高橋工業社長が朝から世田谷村の修繕工事をしている。私のスタッフに溶接を教えてもらうように頼んだので一人二人は溶接を覚えてくれるだろう。昼過大学へ。原口夫妻住宅の件で来室。彰国社編集部の方遂に原稿書ケと言いに来室。中国の件打ち合わせ。夜七時スタジオボイススタッフと中里氏と会食。麻布十番の住宅酒場ラッキーで会食。明日はどう暮らすかなと二三時半過ぎの京王線で考えるが、とりたてて良い考えが生まれるでもない。深夜十二時前世田谷村近くの夜道で向井とすれちがった。